

エレキトロマク子ライーセテラーフの解

洋学文庫
文庫8
C 85
3



玄館の醫師イカファンゲンフルック名 著

エレキトロマク子タイーセテガラーフの解

一 エレキトロマク子タイーセトリックテガラーフ

エレキトルと磁石との
電氣を以て押記する合図

器と
云々 諸語の告知を印符を以て唯統の時の中より

一 邦より他邦へ傳へるものとの

一 エレキトロマク子タイーセテガラーフの速なる事實に想像

の及ぼす福之君此地球に鋼線を行廻す時をエ

キトル子其線を仰ぐ一周する事必也セコンテ セコンテはミ
ミールトナ

全の一ミールトナ
皇國平時六分の一

その是即その既あるせし経験を推て

算亦そのハ即セコンテ十分の一の間は此一周をあるに及し

一古ハリュクトテカラフ

空氣を以て
その全回谷

を用ひし事此械を木

製して常より高取或は仰蓋より置たり是に腕の

り其腕轉動して極りの形を現し此區々の形

を以て文字の印とし能といふはテカラフの宮内

り宮内仰る所を又も全を以て夜半より

ハ此以用をさし隔るる能を鏡の力を限し

に能ともいふエシキトルマガ子テイセテカラフの能

は此際限ある事なり

一

ガルファニーセエシキテイリシタイト ガルファニー名發明
のエシキトル子 テカラフの用

道そのを以て此處を辨け將夕速なる事も各處に

り千七百九十年 寛政
二年 ガルファニーといふ人イタリヤ國

のプロウロ子 地 名を以て此力を為し一國でガルファニスミヌ

といふれ千八百 寛政
十二年 年よりフルターといふ人コロム

箱の
 義を
 作る
 此方
 便を
 以て
 此易
 多
 ガル
 フー
 ーの
 エレ
 キトル
 此の
 興を
 事
 を
 以て
 種々
 極
 械の
 改
 正
 を
 為
 せし
 事
 終
 り
 斯の
 如し
 我
 る
 今
 亦
 を
 以て
 唯
 ワル
 スタン
 人
 及
 靴
 中
 ダ
 ニ
 ル
 名
 の
 説
 子
 因
 之
 の
 初
 向
 也
 ダ
 ニ
 ル
 の
 初
 向
 之
 必
 利
 何
 ぞ
 也
 エ
 レ
 キ
 ト
 ル
 の
 字
 を
 興
 一
 と
 永
 其
 力
 の
 不
 同
 何
 ぞ
 事
 なる
 ワ
 ル
 ス
 タ
 ン
 昔
 何
 の
 ぞ
 其
 ハ
 同
 等
 の
 力
 を
 保
 持
 事
 只
 統
 の
 間
 なる
 此
 ダ
 ニ
 ル
 の
 初
 向
 也
 テ
 レ
 ガ
 ラ
 ー
 フ
 之
 高
 適
 高
 の
 之
 の
 字
 を
 以て
 只
 是
 一
 と
 用

力同く我等今即是之也

一 ダニール名のバッテリー

エレキトルの力を興と爲の葉は入
 有る器を並備を一紙を以

入用の物

品を凡ふ記也

第一 硝子又た石性の器

第二 漆型を以て鑄りたる江丹シリンドル筒形の物形形第

二の筒は出せしめし此筒は長き切目あるを要し是は液
 を多く筒の内面は流着せしめん爲也將又上端は柄取
 是は銅板より續りて導線と繋ぐ

第三 曲折銅板

第四 素焼の臺は、焼く地のうへへ上層を敷くもの
也、第三の圖の如し

一 此處々の物ありて、
丹留を素焼を臺に入尚ほを硝子及び石楠の益を
此硝子益と素焼を臺の向は銅板を
同く次の臺年の江丹より係り素焼を臺の
たすスワールニール 硫黄 硫黄を臺の硝子益と素焼を臺の向

ハ飽過溶解のスワールニールニールニール
硫黄酸銅又一名丹岩 を

なり 此一備を臺とエメント 元図の物 としハエメントを

集え備を臺をダニールのカルファニセバッテリー或はコンタ

ンテガルファニセバッテリーと名にバッテリーの端際を板と稱も

但し、積極 銅板を子カテーポ

ール 消極 此バッテリーを以てエレクトルの力を與

一 是を導線と用く傳電也

一 此處に物ありて導線と石導線ありて導線の長

るるもの諸重及び土也液と亦随分エレクトル子も導
 く事を得るや極む諸重より方るなり導力の比等
 度に出る第一金^諸線の導力を長^サより於ては逆理
 して新切角より面より於てハ順理之依り此導力を全
 部の関係一外部のみより何れに第二導力を能く
 エレクトル子も交通するもの也

第三諸重を必極良の導物なり不導物ハエレクトル
 子を引導せらるて其進をより此時ハ即硝子

石焼物 ^{木液の}キウメベルニヤ 一種 牙、脂、子ヤ、絹等なり

但順理逆理といひしは算家の語なり譬へは

燈 焼火の前は物を置き此陰一尺隔く一寸角何れは

尺三隔く一寸角 ^{一寸角の} 三尺隔く一寸角 ^{一寸角}

九ツ ^{九ツ} ありこの順次の如き隔つは随く漸く増えを

順理と不才順理を違ふ見て次第減るを逆

理と不なり

一エレクトルの動きを一部より他部へ動かし人として

此ハ銅又ハ鉄の導線を不焼の帽を取付たる木柱
の頂に結するなり。ツテイヤにてエレクトルを興し銅
線是を一方の極より相對する極へ導くエレクトルを
木柱を傳へ地中へ流散する事なき事とし不焼帽を
を以て是を支ぬ

一斯の如き趣向を以て磁石之ハ何種の隔といへども思
傳ふ面せしむる事を得能くし今も、爰に云
ふ事何れこのエレクトルを以て印符を記す一件也

是即チキトクマク子テイスミス
ルを以て興し
磁石の事
子用るものなり

一エレクトロマク子テイスミスハ或る都合ありエレクトルの事
を以て生鉄中の磁石の事を興し多し也エキル
の事録は關係する所ハ其鉄中磁石の事なる事何
一銅線を絹又ハ木綿より成る是を圓の如く捻
折り良き生鉄棒を巻く事ありエレクトルを此線を傳
へ一周するハ直に中の鉄棒に磁石の事を含む他の
鉄棒を引る也此を以てエレクトルの業止む所

ハ棹も亦磁石を以て引付たり。鉄俵の付離る此放引の固く或る具の運動を生じエキトル磁石の動力即是の原也

一 斯の如く是を以て、鉄棹二箇を鉄横長物の上

に居る時、即エキトル磁石フーフ

馬蹄也

也此鉄棹

二箇の巻方及對するを要し、譬へハ同一枚目第六の

図の如く、棹を上より下へ巻くは、ある棹を下より

上へ巻く之ガルフアニーの動き、銅線を以て、問を

フーフは磁石の力あり、將て是より南極北極を生じ、斯の如きフーフハ一箇の棹より強を生じ、此を引付る也

一 エキトルマク子タイセテレガラーフハ重りを以て、轉動を

與ふ車具なり、此轉動を紙巻に巻く、紙を

引か、其紙はエキトル磁石の力を以て、運動する、剛

鉄の筆を以て、所符を記し、此所符を用ふる、但し

変改及び増補する事好の儀なり

一 エキトルマク子タイセテレガラーフハ丸の品々を以て、全備

と云

第一 エレキトル字を興る事の樽谷一名バッテリー前よりあり

第二 導線

第三 石焼帽身隔板

第四 エレキトル磁石仕掛ケ印符を記樽谷

一 バッテリーハ前よりありし如し 鈦丹銅素焼壺硫
黄酸硫黄酸銅 硝子又石焼壺を以て全備
と云今此バッテリーを良く動しとんと欲する時ハ

種々の液を器を多くて適量の混和をなせしむる事
肝要なる印九の如し

一 樽谷なる硫黄酸用云々

一 硫黄酸の樽谷方印一分の硫黄酸を四十分の水に
混和せしむる事是を混和せしむる時其硫黄酸を
少くした後水を入る必一時入る登る事
一時入る時ハ大熱を興る事ありし時其
赤心を以て成る事あり硫黄酸を樽谷の時其純

を木上より多き必石上より至へうん石上より至は文文和の
時充滿の熱より少く瓶を破る事易し

溶解硫酸銅用意の事

一 硫酸銅の大塊を木杵を以て搗き、^蓋蓋を入り其上
に熱湯を以て木切を以てかき交り也此時鉄片を
銅を堅く用ゆるん能くして此液を氷に与へて
至き飽を溶解をなすべし

バッテリーの用意 吟味取扱の事

一 バッテリーの銅及び鉛筒を用ふる以前より能く鉄
の磨削具を以て内外面より光る程を磨くを要
し筒の内面を磨んより半圓の鏡及び磨削具
を用ふ也

一 バッテリーを系へ備へて後素焼壺より薄く硫酸
酸銅を以て飽過溶解の硫酸銅を以て其量
ハ素焼壺縁より九一寸の所を以て素焼壺内外
の液何れも同様の言さふ何れも一バッテリー三日を経

下は組合せたる諸具を籠へ筒類は白桶に入
 清水を灌ぎ洗ふ也 鈦丹筒黒く汚るる磨
 削鉄具を以て是を除くへ銅筒の汚るる亦先
 少許の磨るる然してバツテイを再び組合せ也 素
 焼素を惡く成るるを修き 其余を二時 空固一時
 の間水で漬け居る後是を板に乗せ火邊を
 干す或は太陽或は空氣にて乾く然して後其
 期小魚一再び是を用ふ

一素焼素を糸心を有する事あり素焼の日修るる
 何れも又ハ如の程は漏るる時ハ硫酸銅の溶解青
 色を帯び或ハ白くなる然る時ハ亦新の飽過溶解の
 硫酸銅と取替るるを要す
 一素焼素を永く用ひく漏るる時或ハ板多の新銅
 板と取り替へる底又ハ板を集着せし時ハ板下
 なるて面は裂目或ハ漏るるを以て物々を液を極
 しく極たる分母の液を再び入る也 鈦丹筒と

穴裂目 廣き窪等ある時又銅筒の下方喰ちきり
多る時は成りし時を止し是を所除き新なる所を
破るべし

一 銅締錠をえびの所のバッテリー際極の線端ハ光るは
2美く磨き錠は不能なるを必要とし硫黄酸
銅青色層くみ白くおつて是を用達せしむとの
バッテリーより極を向大器を入し是を挿入し硫黄
酸銅を交へて飽きて溶解せしめ然し再ハ

是を用ふ

導線置方の事

- 一 エレキトルケーブル線の置方は三箇あり即空中の
ケーブル線又一名掛線地中線海中線なり
- 一 導線を置る事容易く見ふ事線の隔覆
整ふ事と可成り多し面倒なり一就中隔
り大なる時は此面倒を避る事能ふ
- 一 ガルファニーの動きと數箇の道ある時は其最近

面よりくる者あり即ち磁の極性を以て圓を以て
 如く a ハ エノトト 前より a 極を以て線を以て閉
 係を其形圖の如き a 極を以て矢の向方へ周
 一 今動字ハ線中 a 極より b 極へは強弱不同なりと雖
 a, a の極不在線を以て閉する時 b の極より a
 動字の力減する事若くは又元線 b, b の不
 小導線を結ぶ動字 b の極より a 極へは是
 即ち動字を以て b, b の極より a 極へは周なる

a, a 或は b, b の如き導線とバッテリーとの隔を
 減する時 a, a 極より b, b 極へは動字の力減する事若くは又元線 a, a
 a 或は b, b の如き導線との隔をあけて此線の
 導力元線と同等なる時 a, a 極の業 b, b の極より
 於て全く消去す
 十線 a, a 極より b, b 極へは必要なる事即ち此線は
 以て明なる隔覆を以て a, a 極を以て b, b 極へは
 となる事前條を以て a, a 極より b, b 極へは

導線を柱より掛り事 即ち牽導線

一 柱の間を道例百フィート 一フィートは九
曲尺一尺二分 百三十フィート之

長 サ 十二フィートより十五フィート厚 サ 三四サドイム 下

ハット十
二分一 少くは腐を防ぐ多くと下端を焼き頂を名

焼の帽を以て覆ふ此柱を借ひ線を引道を通

向を尤も丸柱の上端に鐘形の鉄覆具を固め

る鐘より取付け其に覆具の上より掛り成る鐘

の カ を鐘形の石構隔具 シ の カ 字中よりキプス 白キ
土

一 カ 又ハ此類のものを以て固附せしむ此隔具乃

上より真堅の溝 カ 及び直横に環形の溝 カ の

り二箇の鉄線を環形の溝よりえん兩線の端を

堅固のわく行合せ二ツ三ツ捻り溝中より

掃込み線の両端を上の方に曲け

導線 カ を溝 カ の カ 線端 カ を以て掃

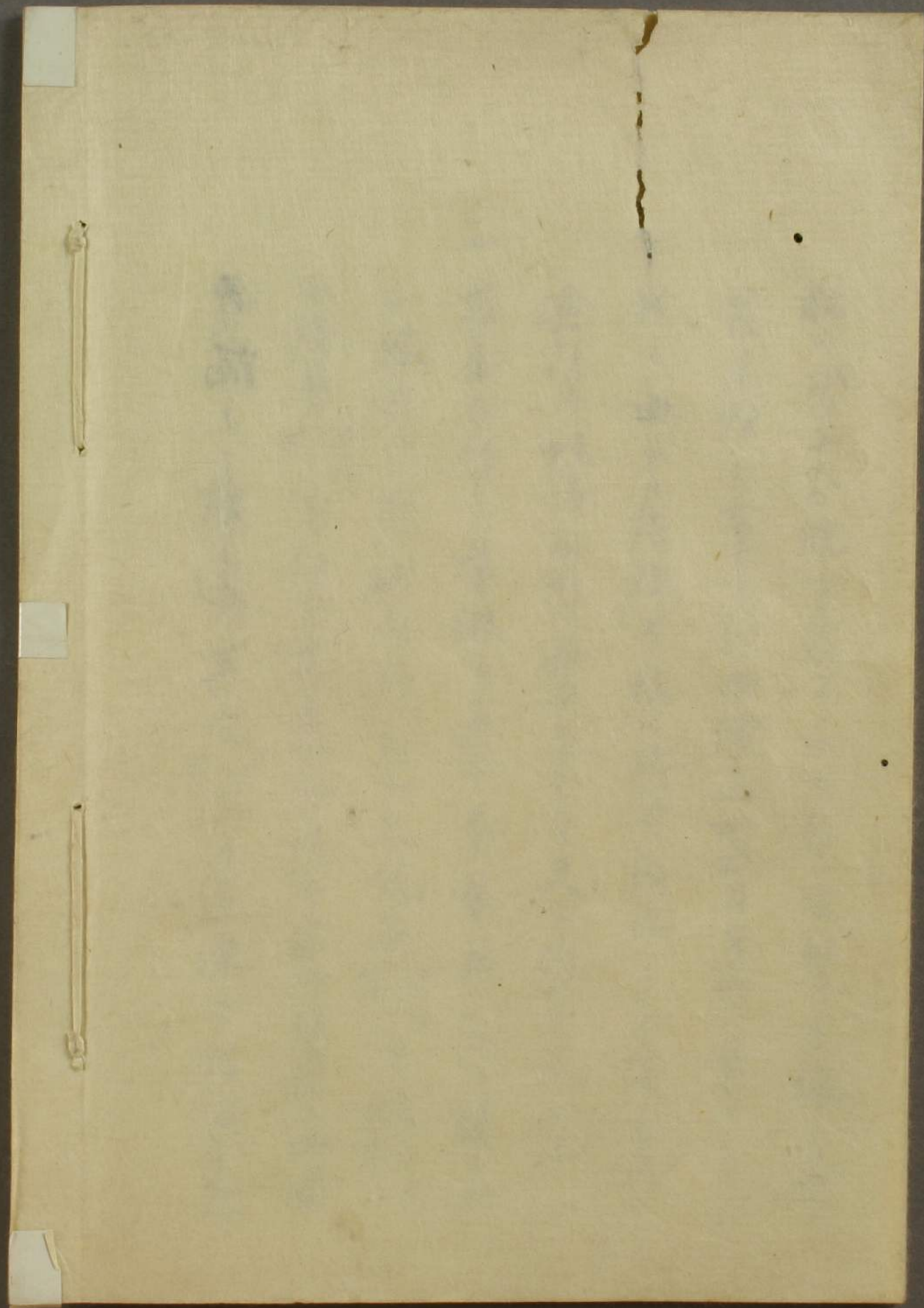
一 道中の事故なく敷箇の導線を用何れ

同一道を通はんときは 付或は石を以て

木の為ふ不線と段ありんか形をとりけり主線と前より
いひ一柱たりありて切向繪糸四枚目第一の圖りておせし
此より曲る鉄棒を柱の腰子、鉄棒よりく締付たり

其際より柱頂同様の器具をえり又し線と結ぶ也
一家屋を傳へる導線と通して事有るありけり圖の如
き器具をいふ砂時計形の石焼釜右のを板右の
より鉄具右のを以てありけり板を家の碓お板より四箇
の陰よりく締付たり其穴右のより導線と結ぶ也

即隔くともなり也



イロハババニホボ
ポヘベペトドチリ
又ルチワカヨタ
ダレツツツ子ナ
ラムウノクヅヤマ
ケゲフブユエ
テテアササキギユ
メニシジヒビピモ
セセスン



林氏白雲

信本堂

テシガチーフに風名に流る

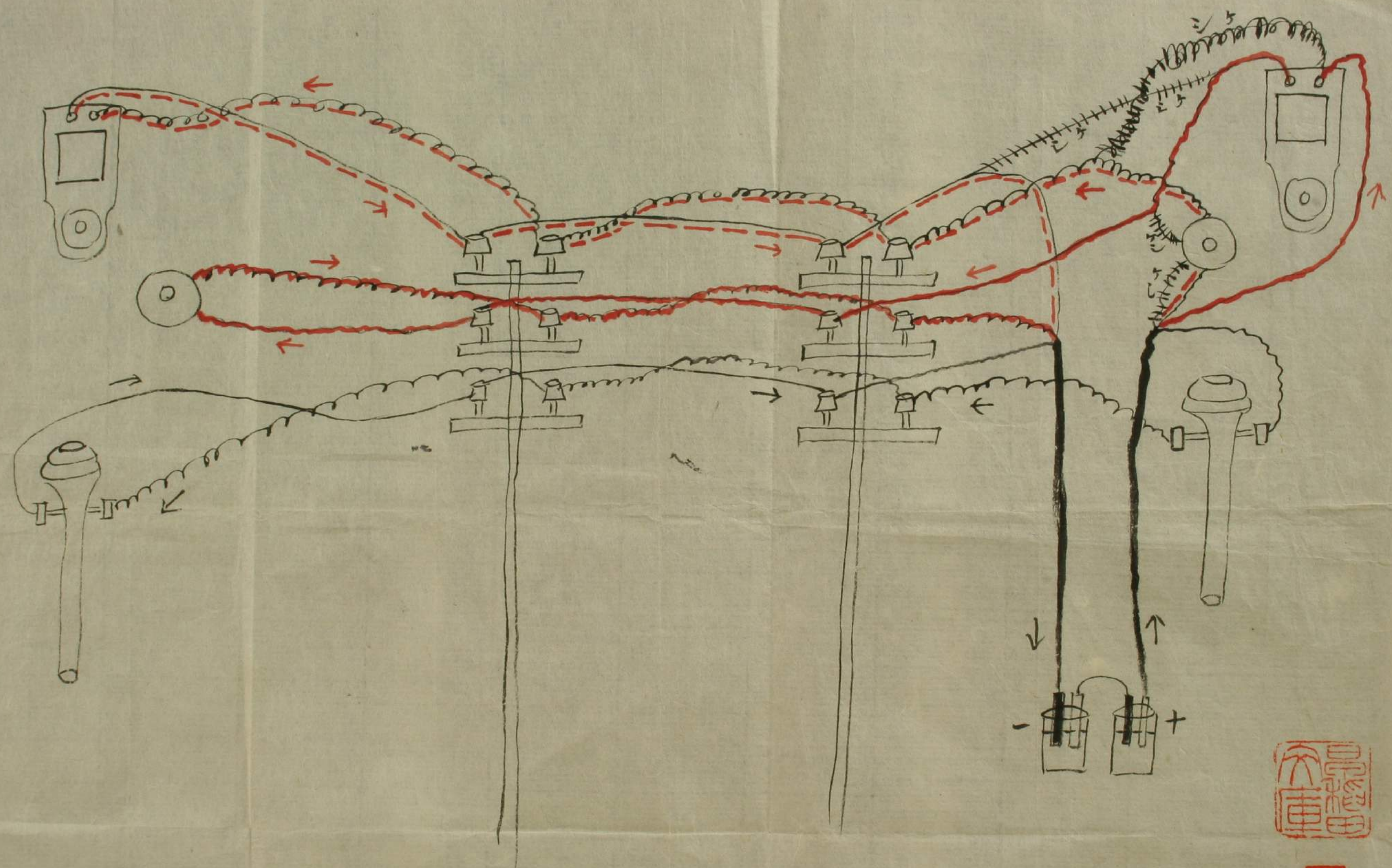
長谷の夜所

世口言文

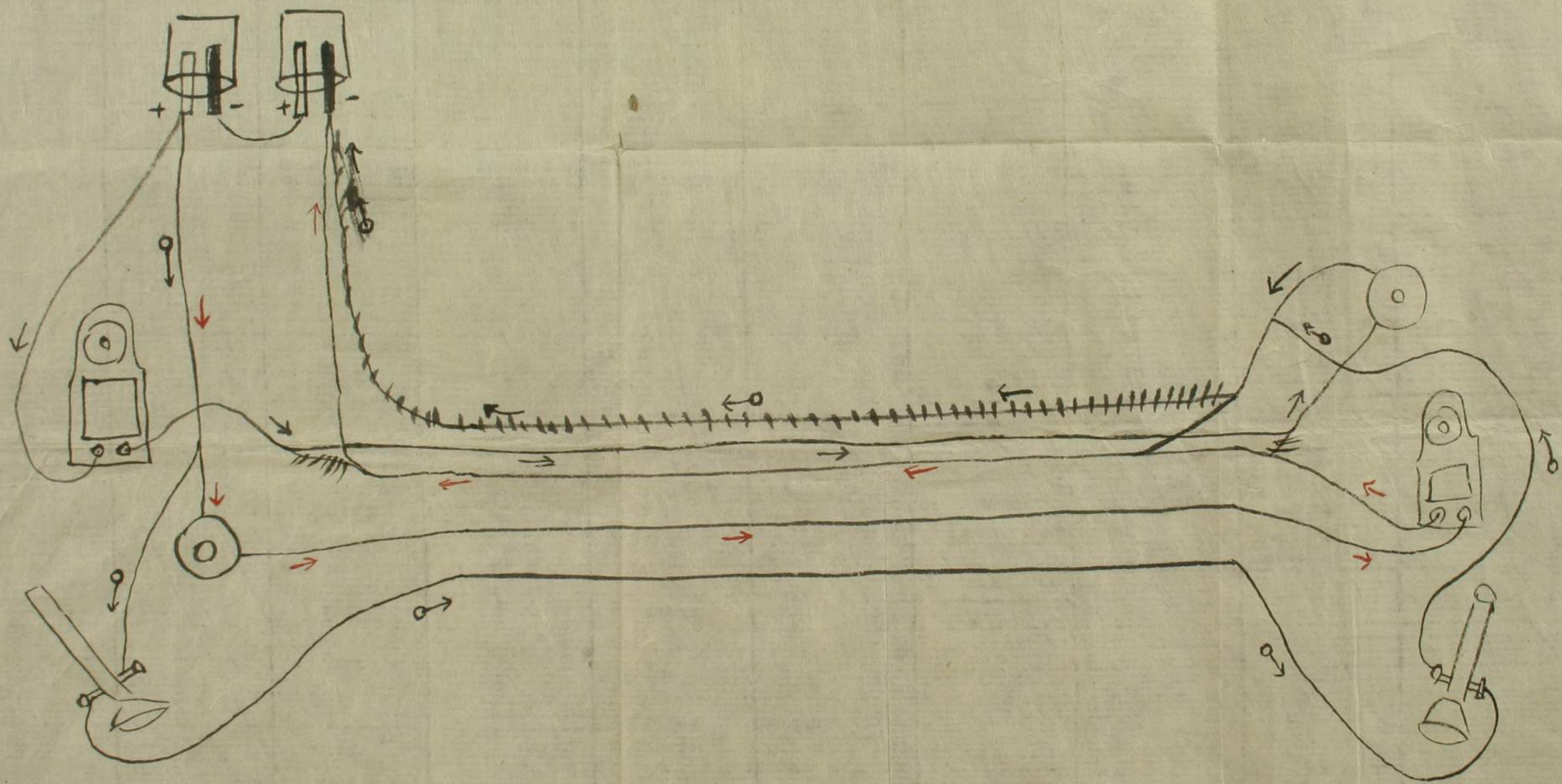
海国伝

古田書

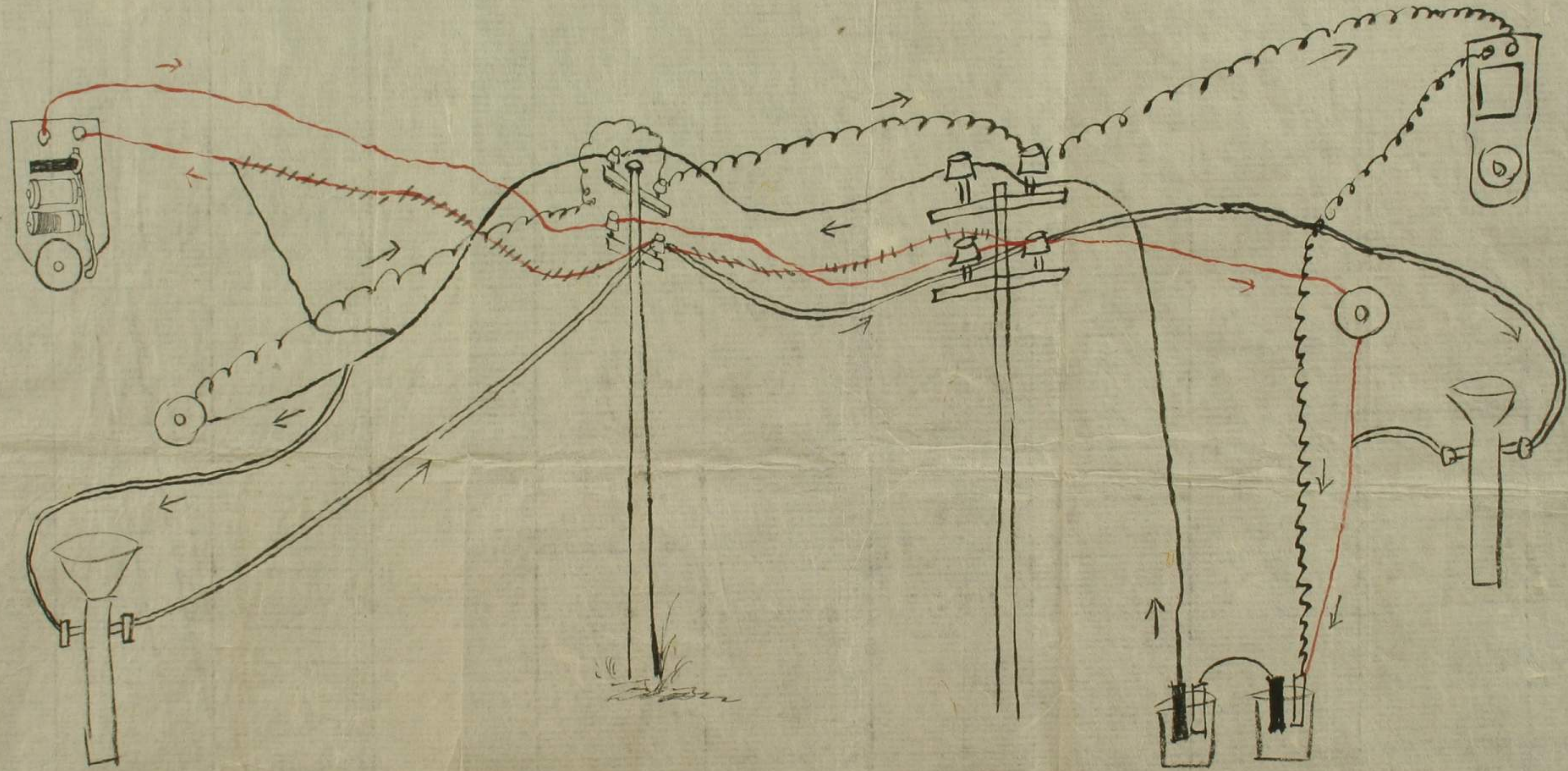
二京百馬



张侯氏白画



Vertical red text impression, likely a signature or date, written in Chinese characters.



左打

右打

晴侯氏白藏書